

## 「2016年タイ・チュラーロンコーン大学サマースクールプログラム 参加報告書」

京都大学大学院法学研究科修士1年 康村 博宣

「日本は豊かな国なのに、どうして幸せに感じる人がそれほど多くないのか。」こんな疑問を耳にしたことがある。たしかに、物質的には恵まれているものの、過労やうつ病による自殺、教育現場での深刻ないじめ問題など、日本ではもはや珍しくなくなった社会問題は「幸福不感症」の源かもしれない。明るい未来、今まさに楽しい、という共通の価値観を人々が有していた高度経済成長期やバブル期と異なり、先行きの不透明な社会では、努力は美德という伝統的価値観さえゆらぎ、不安が人々の心を蝕むのだろうか。窮屈で閉塞的な思考から脱するには、異世界に飛び込むのが一番でっとり早い。

これまで海外への旅行も留学もそれなりに経験していたが、今回のように日本で親しくなった人たちと渡航先で再会し、現地を案内してもらったのは初めてのことであった。旅行ツアーでは行かないローカルなお店で食事をし、ショッピングセンターを縦横無尽に闊歩したり等、刺激的な経験ができたと感じている。特に修了式の後、タイ学生の誘いで美術館へ行き一緒に企画展示を見たときには、いわゆる接待ではなく、同じ目的の行為をもって同じ時間を共有しているという感覚があり、とても満たされた気持ちになった。

今回のプログラム内容は、二つに大別できるだろう。第一に、タイ語という言語に触れること。第二に、現地の学生と共同発表を行うことである。

タイ語は、ヨーロッパ系言語のような品詞の活用がないため文法は単純だが、特有の文字の読み書きを習得するのが厄介である。もっとも、日本語も外国人にはかなり難しい言語のようだが、日本語学科のタイ学生は高度に使いこなす者が多いと感心した。結局のところ、外国語の習得にはどれだけ本気で学ぶかという姿勢が重要な要素になっているように思われる。本プログラムにおいては、出発前にも事前学習の機会があり、「日常会話を習得し、現地で積極的に使用する」という姿勢で取り組んだ。タイ語の授業では、教師の発問に応答し、発表グループではタイ語で自己紹介することもできた。果物売りの名物おじさんと話せたのも嬉しい。ただ、修了式の際に、準備不足のため、日本語での総括になってしまったことが悔やまれる。加えて、タイ語で会話を続けて、少し込み入った議論を行うことが今後の課題となった。

共同発表に関しては、「道德観の違い」というテーマをあらかじめ提案して、タイ学生との打ち合わせにのぞんだ。10日の間に計5回打ち合わせというタイトなスケジュールであったが、道德観について様々な社会問題を事例として議論していくうちに、日本では規範やルールを、タイでは人間関係や人脈を優先する傾向があることに気づいた。もともと農村共同体社会から発展したという点では、日本もタイも共通しているものの、そのような価値観の違いが生じたことは大変興味深い。実際の発表や発表準備を通じて、グループとしては「外国人である一日本人の視点」を考察に加えたことにより活発な議論につながった。それをどうまとめて終結させるか、という難しさはあったものの、ひとまず一つの形として完成したことにより、グループとしての達成感が得られたことは間違いない。さらに、発表スタイルを共有したことで、各人の得意分野における理想的な研究プロセスを具体化でき、有意義だった。

さて、自分の進路に直接の影響があったかと問われると、すぐには答えられないが、ただ一つ関心を抱いたことがある。タイという社会がこれからどう変わっていくか。あるいは根本的なところでは何も変わらないのか。ぜひこの目でその姿を確認できたらと思う。